
夢みたものは

夕菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢みたものは

【Zコード】

Z9677R

【作者名】

夕菜

【あらすじ】

夢を追いかけて、失ったもの 得たもの。

シユントの夢は、自分の歌を多くの人に聴いてもらいたいことだ。
つまり、歌手。

自分の想いを表現できるのは、言葉ではなく歌、だつた。言葉では、表現できない気持ちが、歌にすると自然と自分の口から発することができる。

自分の想いを、誰かに伝えたい。そして、多くの人のうちのたつた一人でもいい、その人が「いい歌だつた」と思ってくれるような、歌を唄えるようになりたかった。

「雨があがつてよかつたー」

シユントは、そう独り言を言つと、歩きだす。

昼間、降つていた雨は夕方になつたら、いつの間にか止んでいた。今は雲の隙間から、茜色の空が見えている。

目指すは、最寄駅。

そこでいつもシユントは、ギターを鳴らしながら歌つていた。
自分の想いを伝えるために。
夢に一步、近づくために。

*

アキラは、夢を追うことについての間にかやめていた。
いつ、やめたかも忘れてしまつた。きっと、ずっと昔のことなんだろう。

今、思うことはただ一つ。

夢なんて見るもんじゃない。

いつか、必ず裏切られる。そして、これからの中未来に期待なんかできなくなる。

そんな思いをするぐらいだったら、最初っから夢なんて持たない方がいい。

夢が叶う条件は、誰もが認める才能がある、ただそれだけだ。それ以外の奴らが、いくら努力したって、夢は叶わない。ただ、時間だけが無情に過ぎ去つていくだけだ。

「アキラー！今日の帰り、カラオケ寄つていこーぜ！」

その声に振り返ると、そこにはシュントがいた。

「無理。明日、テストだる。今日は、帰つて勉強する」

アキラはいつものようにそつけない返事をした。

それでも、シュントはまだ諦めてないらしく、

「アキラは眞面目だなあ。いいだろ？勉強なんて、徹夜でもなんでもすれば思う存分できるー！今日はカラオケに行つてもらうからなー！」

「・・・一人で行けよ」

アキラは、そう言つて黙々と机の中の教科書をカバンに詰め込んだ。

「一人じゃつまんねーだろー？」

シュントは、無理やりアキラの腕を掴む。そして、アキラはシントに引きずられるようにして、教室からでた。

*

アキラは、シュントの夢を知つていた。

そして、シュントが夢を叶えるため、ほぼ毎日、駅前で歌つているといふことも。

アキラは、それを、見た時がある。

シュントは、とても穏やかな表情で音を奏でているのに、通りすぎ人々はそれを見ようともしない。

まるで、そこにシュントが存在していないかのよう。まるでそこに歌が存在しないかのよう。

通り過ぎる人々はみな、仕事で疲れきった顔のまま。

アキラは、その光景を見て思った。シュントは可哀そうな奴だと。夢は叶わないも同然なのに、シュントはそれに気付いていないのだ。

*

シュントが、いつもの時刻、いつもの場所に行くとそこには一人の女子高生がいた。

彼女は、シュントがやつてくると、恥ずかしそうに微笑み言う。「今日も歌うんですね？いつもより、早めに学校が終わつたんですけど、聞きたかったので、待つてました！」

「なんだ！嬉しいなー」

シュントは、彼女のことを知っていた。

数週間前から、自分が歌いだすと、人が少しづつ集まつてきてくれるようになった。その中の一人に、彼女がいた。

彼女は、自分から一番近い位置に立ち、シュントの歌が始まると静かに目を閉じ、歌に耳を澄ませてくれた。

彼女は、自分の歌を聴いて何を思つてくれているのだろう。歌に乗せた、この思いを感じてくれているのだろうか。

・・・そんなことは、分からぬ。ただ、自分の歌を聴いてくれている誰かがいるだけで、幸せだった。

シュントは、ギターを取り出し、歌を口ずさんだ。

彼女は、穏やかな表情で音楽に耳をすませる。そして、行きかう人々もポツリポツリと立ち止まり、シュントの音楽に耳をすませていった。

*

「アキラって、生きてるのがつまんないって顔してるよな

ある日、ショントに何気なくそう語られた。

「そんなことない……」

アキラは即答したが、内心ではドキリとした。

・・・確かに、自分は毎日がつまらない。そのことは、きっと生きているのがつまらないといふこととほぼ同じことだらうと思つた。それに比べ、ショントは毎日、楽しそうだ。なぜこんなにも楽しそうなのか、アキラには全くといいほど分からない。だつて、“楽しさ”が毎日続けば、それは日常になる。そして、そこからは“楽しさ”はいつのまにか、消えてしまう。

「・・・ショントは、昔から夢を追いかけてるだろ？・・・まだ叶わないなんて辛くないのかよ？」

今度は、アキラが気になつていてることを訊いてみた。

すると、ショントはニカッと笑つて、言つた。

「おれは、まだ、なんて思つたことない！だつて、これからが勝負だ！諦めない限り、可能性はまだまだある！…」

その日の夕方。

アキラの足は、自然のあの場所に向かつていた。

そう、ショントが歌つている駅前に。

昼間、ショントが言つていた言葉を聞く限り、彼は、まだ夢を諦めるつもりはないらしい。だから、諦めさせようと思つた。「歌手になんてなれるはずない。ショント以外にも、歌が上手い奴なんていくらでもいるんだから」と言つてやりたかった。

夢を見る期間が、長くなれば長くなるほど、後から辛くなる」とアキラは知つている。

今、止めればまだ間に合ひ。

すると、ショントの歌が微かに聞えてきた。

その先を見ると、そこには人だかりができる。

「…・・・」

アキラは信じられない気持ちで、その場所へ向かつて走り出した。

そして、見つけた。ショントの姿を。

ショントの歌に耳を傾けているのは、みなアキラの知らない人。ショントは、多くの人の前で、とても楽しそうに歌っていた。以前、ここでショントの姿を目にしたときは、まるで違う。みんな、ショントの存在を認め立ち止まっている。そして、みんなショントの歌を穏やかな表情で聞き入っていた。

アキラは、信じられなかつた。

ショントはアキラの知らないことひじりで、夢に一歩、近づいていたんだ。

「・・・」

止めようと思つたのに、止められなかつた。だつて、こんなにもショントは楽しそうだ。

他に何も望まない、そんな表情を浮かべ、ショントは音を奏でている。

アキラも、いつの間にかショントの奏でる音楽に聞き入っていた。その音は、自然とアキラの心にしみ込んでくる。

（俺も・・・）

それは、自分があの頃大好きだつたあの曲に、雰囲気が似ている気がした。

・・・ショントと同じような表情で、あの時のように音を奏でたい。

アキラはそう思つてしまつた。

まだ夢を叶えられないショントは決して、辛うではなかつた。むしろ、幸せそうだ。

（そつか・・・）

ショントは、歌うこと楽しんでいる。思いつきり歌つていてる。だから、諦めないんだ。

アキラは、踵をかえす。そして、走りだした。

アキラは、自宅に到着すると、自室に駆け込んだ。

（確か・・・あの時の楽譜は・・・）

クローゼットの奥にしまい込んだバッグの中に入っていたはずだ。アキラは、クローゼットを開けるとそのバッグをすぐに見つける。そして、中身を確認した。

「・・・」

（懐かしいな・・・）

これは自分のお気に入りだった曲。

音楽一家に生まれたアキラは、将来、ピアニストになることを夢見ていた。もちろん、親もそれに大賛成で。

しかし、試験に挑戦するも失敗の連続。自分と同じ年齢の人は、ほとんど合格してたのに。

親の期待が嫌で。本番の緊張で絡まる、自分の指が大嫌いだった。そして、いつの間にかピアノの弾く、ということ 자체も嫌いになつていた。

（・・・もう一度弾いてみよう）

あの頃のお気に入りの曲を。

上手く弾けなくともいい。だから、頑張ることができる。
・・・そうしたら、きっとまた、大好きな曲になる。

end .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9677r/>

夢みたものは

2011年3月27日11時25分発行